

【書 評】

原田智仁著『世界史教育内容開発研究－理論批判学習－』

(風間書房, 2000)17,000円

池 野 範 男

(広島大学)

本書は、原田智仁氏が1997年に広島大学大学院に提出された学位論文を公刊されたものである。これまでの教科教育学研究が歴史研究、理論研究に重点化されていたのに対し、本書は教科教育学の基盤となっている実践にもとづいた研究であり、教育内容開発という新分野を切り開いたパイオニア研究と評価できるだろう。

目次を章のレベルで提示してみよう。

序章 本研究の意義と方法

第一部 世界史教育内容開発の理論

第一章 教育内容開発の理論と方法

第二章 歴史教育における理論批判学習

第三章 世界史教育内容論

第二部 地域世界史の教育内容開発

第四(五・六)章 東アジア(インド・中東)

世界史の教育内容と教授＝学習モデル

第三部 近現代世界史の教育内容開発

第七・八章 近現代世界史の教育内容と教授＝
学習モデル(1)(2)

第四部 社会史的視野に立つ世界史の教育内容開発

第九・十・十一章 社会史的視野に立つ世界史
の教育内容と教授＝学習モデル(1)(2)(3)

終章 (参考文献 はしがき)

原田氏は本研究において、世界史授業づくりを科学化し、それを教育内容開発として理論化することを追究している。

そのために使用された研究道具が「教授計画書」と「理論批判学習」である。教授計画書は授業づくり、授業構成を理論化し、教育内容開発を進める。また、理論批判学習は世界史学習の構造と過程を提示する。この2つを用いて、地域世界史、近現代世界史、社会史的世界史の領域で8個の小単元各々が、①歴史理論を教育内容として確定す

る、②歴史理論を事例と問いで教育的に加工する、③生徒に批判的に探求させる教授計画書に仕上げるという3段階で開発された。教授計画書と理論批判学習という研究道具が世界史授業づくりで使用可能であることが証明されるのである。

最初に開発された小単元「イギリス産業革命」では「世界資本主義」論が取り上げられたが、提唱者角山栄氏自身の研究分析(『中央公論』2000年2,3月号)をみると、原田氏の分析の正鵠さが納得されるだろう。この理論を正確に分析し、教育的に加工している。理論分析の適確さが授業づくりと授業の質を決定するからである。

本書の特筆すべき意義の第一は、世界史教師自らの教育実践を対象化し、反省・吟味を施し、そこに含まれている理論を明示・検討した、実践の理論化方法を提示したこと、第二は、教育内容の基盤をヨーロッパ中心史からグローバル史へ、事件史から構造史へ、誇大理論から中範囲理論へ変えた世界史教育改革論になっており、現実を変革していること、第三は、世界史の授業理論の理論化と授業づくりの過程と学習の過程の3つが「批判的合理性」という理念で示された、科学主義の研究方法論で貫かれていることである。第四は、教科教育学が理論と実践の統一を主張し続けてきたが、この主張を実際の研究レベルで証明したことである。これが本書の最大の意義であろう。

読みやすく洗練された筆致で書かれた本書は一方で、日々教育実践を進められている先生方に自らの授業を吟味・考察し研究する具体的な方法を、他方で、開かれた社会と自立的市民という社会論、批判可能性という教育論を根底に据えた科学主義歴史教育理論の哲学を示している。是非、目次から熟読されることをお勧めしたい。